



学校だより

日常生活への対応力

副校長 斎藤 忠雄

コロナ禍の中でも、がんばれるタイプの人間とは・・・

一昨年から続く、コロナ禍の中、刻一刻と日常生活が変化しています。このような社会状況の中では、人は時として気持ちを平常に保つことが難しい事もあります。普段なら何でもないようなことに気持ちが高ぶったり、落ち込んだりすることもあるでしょう。そうした社会状況の中、どんなタイプの人間が平常心を保ちながら生活できるのでしょうか？私はこの夏休み、だいぶ昔に読んで感銘を受けた五木寛之さんの著書「大河の一滴」を再び読む機会がありました。その本の一節で、とても印象的な箇所がありましたので、以下に紹介したいと思います。

たとえば、南極でテント生活をしていると、どうしても人間は無精になるし、そういうところでは体裁をかまう必要がないから、身だしなみということはほとんど考えなくてもいいわけです。にもかかわず、なかには、（中略）「おはよう」と挨拶し、物を食べるときには「いただきます」と言う人もいます。こういう社会的なマナーを身に付けた人が意外にしぶとく強く、厳しい生活の中で最後まで弱音を吐かなかったというわけです。これはおもしろい話だと思えます。礼儀、身だしなみ、こういうことは極限状態のなかでは最後に考えることのような気がします。しかし実際には、（中略）小さいときからの自分の生活態度をずっと守りつづけたようなタイプの人のほうが、頑強な熊のような大男よりも、かえって最後までがんばり抜いて弱音を吐くことがなかった、という。

「大河の一滴」 五木寛之：幻冬舎文庫 より

「小さいときからの自分の生活態度をずっと守りつづけた・・・」とあるように、この当たり前の生活態度を学校、家庭、地域と協力して子どもたちに身につけさせることの大切さを感じました。是非、このような社会状況だからこそ、今後も、基本的な感染防止対策を徹底しながらも「挨拶」をはじめ、人とのコミュニケーションを大切にしたり、あらゆる人・物・事に感謝したりする心など、人として社会の中で生きていくために大切なことを育んでいければと思います。

9月以降も校外学習や宿泊行事が予定されています。今後のコロナウイルス感染拡大の状況によっては、縮小、延期、中止等の対応をせざるを得ないこともあるかもしれませんが、なんとか実施できる方向を模索してまいります。ご家庭、地域の皆様のご理解ご協力の程、よろしく願いいたします。